

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十六年四月二十八日逓送省特別授承認可第三五二號
昭和二十六年一月廿五日印刷

浄土

第十七卷

第二號

涅槃會のころ 吉田絃二郎

東北の法然上人像 大橋俊雄

二月號

迷ひのころ 竹中信常

一枚起請文講讀 藤井實應

1951

2

公智 公德

福澤諭吉は、その「文明論の概略」で、徳義にも智慧にも二様の區別があることを言っている。「眞實、潔白、謙遜、律義」の如き一人の心の内にあるものを私徳と呼び「公平、正中、勇強」の如き人間の交際上にあるものを公德と稱している。智慧の側に於ても、私智と公智とを區別した。何を私智とし、また公智とするかは、兎も角としてこうした區別の仕方に私は興味を感じる。

日本人に欠けているのは、まさしくその公德、公智の面に於て著しい。日本人はその歴史に於て佛教による思想的、生活的訓練を受けたことも長いが、それは私智に屬する部分が多かつた。しかし佛教自體は一個人の中に踰越するような私智だけを説いたものではない。小我に對する大我を説いていることでもよく分る。しかし自己修養、個人修養に中心が置かれてきたことも事實であり、之が更に社會にまで擴大されることを欠いていた。公智、公德の訓練に於て欠ける所が大きい。

現に毎日の新聞をみても、街頭を歩いてても、この公智、公德の思想的訓練があつたらもう少し何とかなると思われる場面が少なくない。健康な思考に基く精神的基盤なくしては、何ことも發足し難いものであることは、言うまでもない。佛教の戒律の如きも、今こそ、新しく現代の社會生活に對して、訓練のよき糧となるために、はつきりと再び打ち出されねばならない。社會は新しい戒律を必要としている。(藤田)

目次

一枚起請文講讀……………	藤井實應(5)
伯父の信仰……………	新保義道(18)
私の浦島太郎……………	藤田寛雅(12)
涅槃會のころ……………	吉田絃二郎(1)
東北の法然上人像……………	大橋俊雄(9)
法然上人の映畫……………	須藤隆仙(15)
七福神の話……………	佐藤密雄(20)
迷ひのころ……………	竹中信常(22)
芝園だより	



涅槃會のころ

吉田 絃二郎

冬枯れの武藏野を歩いてゐる間に日が暮れかゝつて來た。わたくしは、ふと、田川の細い流れの面に映つてゐる八日ころの淡い月影を見出した。その刹那に遠い昔、母に抱かれて山村の農家の庭で野天風呂にはひつた月の夜のことを思ひ出した。

恐らく三つくらゐのころであつたらうと思ふ。わたくしが生まれてからの最初の記憶であるが、湯槽の中の水に映つた月の光りの美しかつたこと、水がかきみだされる毎に月の光りが湯槽いづばいに碎かれる美しさが幼な心を囚へてしまつた。

そのをりのことであつたか、何らか知る由もないが、わたくしを抱いて母が山の親戚を訪ねて行つた時の話である。一頭の猪が數歩の前を横切つて、溪川に飛び込んで逃げて行つたといふことを、母がよく話してゐた。

わたくしは遠い昔の母の懷^{ふところ}を思ひ出しながら田川に沿うた小徑を歩いて行つた。

それから數日、わたくしは毎日午後になると武藏野を歩いて、同じ田川に映る夕暮の月影を覗いては母を思ひ出した。

いつもはなかなか忘れるともなく忘れがちな遠い日の母の姿を、わたくしは毎日つゞけて思ひ出しながら冬枯れの野を歩いた。

わたくしは小ひさな田川の面に映つてゐた月の影に感謝したい。その淡い月影こそわたくしに母を思ひ出す尊い機縁をあたへてくれたのだ。

麥はもう三、四寸に伸びた。早咲きの櫻もちらほらのころとなつた。子供たちは終日麥畑の中で紙鳶を揚げて

ゐる。

夕暮の空に淡い月が上つてゐた。暮れてゆく空に忘れられたやうに紙鳶が飛んでゐた。

わたくしは少年のころを思ひ出した。日が暮れて、丸い月が出るまで麦畑の中に立つて紙鳶を揚げてゐたわたくし自身の少年時代を思ひ出した。と、同時にやさしい母の眼を思ひ出した。

母は麻を買つて来てはわたくしのために糸くり車を廻して紙鳶の糸を作つてくれた。麻は光つて、ほごす毎にぱりぱりと新鮮な音を立てた。母は薄暗いランプの下で夜おそくまで糸くり車を廻してゐた。

麻も夕暮の紙鳶もわたくしにとつては、遠い日の母を思ひ出させる尊い機縁である。

沙羅の花の咲くころになれば、佛弟子たちの胸は亡き釋尊を思ふて、刺さるゝが如くであつたであらう。かれ等は死ぬ日まで、年ごとに沙羅の花の咲くころになれば釋尊の涅槃の日を想ひ起こすことによつて、胸を痛めつけられたことであらう。

しかし、沙羅の花咲くところこそ佛弟子たちにとりてはこの上もない尊い機縁であつたであらう。かれ等は沙羅

の花を見ることによりて涅槃に入り給ふた釋尊の姿を今さらのごとく胸に描き、ひたむきな信仰心を取りもどしたであらう。

わたくしは、かつて伊豆の旅で、山の寺を訪ねて行つたことがあつた。たまたまその日は涅槃會に當つてゐたので、本堂には古い涅槃繪が懸けられてあつた。若い住職は歌人であつたが庫裏の爐邊で茶を點てゝくれたりして、半日の清談を楽しむことができた。

山門を出て數歩のところ美しい流れがあり、岸には天鵝絨のやうに柔かな猫柳の芽がかがよふてゐた。

若い禪僧は山門に立つて、歸つてゆくわたくしを見送つてくれた。

それから二、三年後のことであつた、若い禪僧の計に接したのは。

猫柳の天鵝絨のやうな芽を見るところになれば、山の禪寺の涅槃會を懷ひ、山門の前に佇んで見送つてくれた若い禪僧を想ひ出す。二月の寒風におのゝく一枝の猫柳にも尊い機縁はある。

童心にかへるといふことはありがたいことである。人

は童心を失つた時、神を忘れ、佛を見失ふ。

嬰兒は月の光りに驚歎し、鳥の鳴く音にもおどろく。

木の葉のそよぎにもおどろく。かれ等の魂は純一無雜なるがゆゑである。

昔ギリシヤの豫言者たちは木の葉のそよぎの裡に神託を聞いた。

童兒たちは木の葉のそよぎにおどろく。かれ等はギリシヤの豫言者たちに近い、するどい感受性を持つゐるからである。

大自然に對して、人生のさまたまのあらはれに對して驚歎し、感激する心を失ふ時、わたくしたちは地獄に墮ちたのである。

一枚の紙薦を恵まれることにも童たちは胸をとどろかせて驚歎し、感謝する。この美しい童心をもつて観るならば、この人生にはいかにありがたいことばかりが遍満してゐることであらう。

先づ、わたくしたちは、今日一日の命をあたへられてゐることに對して、いかほど高い感恩感謝の言葉をくりかへしてもいい筈である。一日、一時の命は巨億の富にも替へがたいものである。童たちはたゞ一枚の紙薦にも胸をふくらましてよろこぶことを知つてゐるのに、大人

たちは一日一日の命のありがたさに對して感激することゝ忘れてゐる。

わたくしは毎日武藏野の片隅を歩いてゐる。

わたくしは狭い小徑で、牛を引いた男や、野菜を積んだ荷車の男たちに出會うては道の傍に佇む。そのやうな時、「すみません」と言葉をかけてゆくのは中年の男たちである。それにつれてわたくしも「どういたしまして」と挨拶する。

わたくしたちは微笑を取りかはす。その刹那、落漠たる冬枯れの武藏野に春めいたあたゝかなものが漂ふ。人生に於ける極樂である。かれ等も救はれ、わたくしも救はれる。

若い青年たちは冷たい視線を投げかけるばかりで、通り過ぎてしまふ。

かれ等は路傍の人に對して感恩の心を失つてゐる。

かれ等のこの冷たい心は神佛に對するありがたいといふ心をも失つてゐる。

かれ等は地獄の境涯に墮ちてゐる。戦争が今の青年たちの冷たい心を生み出したのであることを考へると、かれ等は氣の毒である。

しかし氷てたる土も三月の光りがただよふころになれば、解けはじめるやうに、かれ等の冷たい視線も時が経てばあたゝかなものとなるであらう。わたくしは人生の美しさ、よさ、正しさを疑ふことはできない。

二月だ。猫柳の芽がかゞよひはじめた。

釋尊の尊い、靜かな涅槃を思ひ出す。

伊豆の山寺で啄木鳥の木を啄く音を聴きながら茶を喫した涅槃會の日を懷ふ。

二月は涅槃會一日のためにとりわけでありがたい月である。

四月八日の釋尊の誕生日も尊い。臘八のお悟りの日も尊い。しかし二月の涅槃の日は一層ありがたい氣がする。

人はいかに生くべきか、そしていかに死すべきかを、最も美しく、示し給ふたのが涅槃であると思はれる。



眞 實

現實は痛切である。あらゆる甘さが排斥される。

現實は豫想できぬ豹變をする。あらゆる平衡は早晩打破せられる。現實は複雑である。あらゆる早合點は禁物である。

それにも拘はらず、現實はその根柢に於て、常に簡単な法則に従つて動いてゐる。達人のみがそれを洞察する。

それにも拘はらず、現實はその根柢に於て、常に調和してゐる。詩人のみがこれを發見する。

達人は少い。詩人も少い。吾々凡人はどうしても、現實に促はれ過ぎる傾向がある。そして現實の様に豹變し、現實の様に複雑になり、現實の様に不安になる。そして現實の背後に、より廣大な眞實の世界が横はつてゐることに氣づかないのである。

現實の外にどこに眞實があるかと問ふことなかれ。眞實はやがて現實となるのである。

一枚起請文講讀(完)

藤井實應

たゞし三心四修と申すことの候は、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふうちにこもり候なり

往生極樂の爲には、本願を信じて南無阿彌陀佛と申すばかりであります。昔から三心四修ということが念佛の心得として沙汰されてゐますから、こゝに三心も四修も南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふうちにこもつてゐることを明らかにしたもうたのであります。

三心とは至誠心、深心、回向發願心のことです。「極樂に生れんと願ふ者はこの三心を具足せねばならぬ。三心を具足するものは必ず往生が出来る」と觀無量壽經に説かれています。

至誠心といふのはまごゝろであります。すなほな心、かざらない心である。生れつきのまゝで極樂に生れたいとお念佛申す中に至誠心はふくまつてゐる。即ち善人は善人な

がら、惡人は惡人ながら、腹あしき者はあしきまゝ、愚かな者は愚かのまゝ、助けたまえと願う、それが至誠心であります。

深心とは深く信ずる心であります。私如き愚惡のものは解脱の道なきものと下しはてゝ、たゞ阿彌陀佛の本願のみ必ず我と救いたもうと信ずる心であります。

回向發願心とは極樂に生れたいと願う心である。またすべての善根を往生極樂の道にむける心であります。

すなほな心で深く信じて阿彌陀佛の極樂淨土に生れたいと願ふ心、これが三心であつて、別にむつかしいことではありません。

「南無阿彌陀佛とは別したる事には候はず、阿彌陀ほとけ

助けたまへと思ひ、口に南無阿彌陀佛と唱ふるが三心具足の念佛にてあるなり」

と上人は常に仰せられました。即ち南無阿彌陀佛と唱ふる中に三心はこもつてゐるのであります。

次に四修といふのは、恭敬修、無餘修、無間修、長時修であつて、これは念佛を策勵し、その實踐を進める四とほりの清規で、同時にそれは念佛者の生活態度であります。

恭敬修は敬ひ拜む生活であります。阿彌陀佛をはじめ、觀音菩薩、勢至菩薩等極樂の聖衆や、佛法僧の三寶や善知識等を敬ふことで、其他人に對しても物事に對しても敬ひの態度をもつてすることです。念佛申せばおのづとこの敬ひの態度となるのであり、またこの態度を以てするとき、念佛は一層勵まれるのであります。

無餘修は念佛以外の餘行を交えないで、専心念佛を修することです。一すじの道を進んでこそ物事は成就できる。正信の念佛一行で進み、迷信邪教に迷はぬ生活であります。

無間修は念佛を相續することです。最もすぐれた相續は、念佛を念々相續すること（念々相續）で、法然上人や二祖聖光上人が一日六萬七萬の念佛を相續せられたのはこの念々相續の模範であります。その次は時をへだてず

念佛を稱へてゆく（時々相續）、最低は一日少くとも一回は念佛申すこと（日々相續）であります。これらは何れも相續で、念佛さへ相續すれば往生できるのであります。またあやまちを犯す時は、すぐに念佛を申してサングスする。念佛を主人公とした、すきまのない生活がこの無間修であります。

長時修といふのは前の恭敬、無餘、無間の三修を今日より臨終の夕に至るまで相續し、あともどりしたり他に誘惑されたりしないで、たえず如來の光明に照されて、日に日に新に進みゆく生活、それが長時修であります。

四つに分けて説明するといへんむづかしいことのようにですが、それはたゞ本願を信じて南無阿彌陀佛と申せば、これは法爾自然の道理にて、如來の御導きにより、自然にかような生活が展開されてくるので、この四修も要するに南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ中にこもつてゐるのであります。本願に信ぜ口に南無阿彌陀佛と唱ふる念佛の上に三心も四修もおのづから具はるのであり、三心も四修も知らぬ者の唱ふる念佛に、三心も四修も皆こもつてゐるのであります。それゆゑ法然上人は「源空が目には三心も南無阿彌陀佛、四修も南無阿彌陀と見ゆるなり」と仰せられてゐるのであります。

このほかに奥深きことを存せば、二尊のあはれみにはづれ

本願にもれ候べし

これは前にも一言したように、起請文といはれるわけで法然上人の御心は、そのほかに何のかのとむつかしい事を知つてゐて、その奥深いことがまだあるなどいふことならば、自分は二尊（釋尊と彌陀等）の御あはれみにはづれ、阿彌陀佛の本願にももれるであらう。このほかに奥深いことは何もないぞ、只南無阿彌陀佛と申せば極樂に往生がで

きるのだと、法然上人御自ら二尊のみ前に御誓言遊ばされたのであります。往生の一大事なればこそかゝる恐ろしき御誓言までなされたのであつて、今日惱めるわれらの爲に救ひの門を明らかにせんと、上人の世にも超えて深き慈悲の發露よりなされしことゝ有難く拜せられるのであります。

念佛を信ぜん人はたとひ一代の法をよく／＼學すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智のともがらに同じうして智者のふるまひをせずして只一向に念佛すべし

念佛を信する人は、たとひ釋尊一代に説きたまひし法をよくよく學んだ大學者も、學問で往生できるのでないから一文不知の愚鈍の身に同じうして、本願を信じて只一向に念佛せよと結んで勧められたのであります。

一文不知の愚鈍の身になしてとは、覺えたことを忘れよとか、學問をするとか、迷ひ深く心くらかれとかいふ意味ではもとよりない。往生極樂の道は、學問や智慧や才覺で出来るのではない、その有無は救ひに關係がない。阿彌陀佛の本願にうちまかせて念佛申すものが救はれるので

ある。それ故、智慧を物だてず、才覺を加へず、只本願を信じて一すじに念佛申すことは、一文不知の者の如くであれといふ意であります。一代藏經を讀破した佛教學者も本願を信じて名號を稱えて往生が出来、愚鈍無智の人も本願を信じて名號を稱えて往生が出来、少しもかわり目はないのであります。學問や智慧が鼻にかゝつては往生の邪魔になる。一代の法をよく學んでも、それらの學問は往生の上には無力であるとなげ出して已を空しうするが、一文不知の愚鈍の身に同じうする所以であります。一文字も分ら

ぬ在家のものが髪を剃て尼入道となつたあの無智の輩に同じくし愚鈍の身となりはてゝ只一向に念佛すべきであります。まことに少しにても賢くだてな心があつたならば、佛の御心には叶はないのである、只早くも無智無能の境界に降りてゝ南無阿彌陀佛と申すばかりであります。古歌にも

一文字もおもひわかざる身となりて

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

と、「只一向に念佛」することが一枚起請文の結語であると

證の爲に兩手印を以てす

淨土宗の安心起行この一紙に至極せり。源空が所存この外に全く別義を存せず、滅後の邪義をふせがんが爲に所存を記し畢んぬ

建曆二年正月二十三日

大師在御判

兩手の印を以て證とすとは、わが國古來からの習ひで、大事な證文は兩手を以て印としたものである。今、法然上人、一切衆生の救はれる一大事を明かにしたもう御遺誓であるからていねいに兩手の印を押されて證とせられたのであります。

安心とは心のすえ方で即ち三心のこと、起行とはひとすじのつとめで即ち念佛申すことであります。安心起行もこの一紙にすべておさまつてゐる。上人御自身源空の所存は

同時に、上人八十年御生涯の結びのお言葉であります。

念佛には佛の十力四無畏三身四智などいふ佛のあらゆる功德がふくまれてゐると上人は仰せられました、この事は念佛の中から限りなくよいものが生れてくることを意味する、法然上人の深い體驗の境地からあふれ出たところのみ教は、結局「只一向に念佛」であります、只一向に念佛申して起きるも寝るも、食事も、仕事も、人の應待も、物を扱ふもみな南無阿彌陀佛の中に消息するにあります。

このほかにはない、滅後の邪義を防がんが爲に所存を記し畢んぬと書き止めたもうて、滅後の學者に眼をつけよと驚かせめさせさせて下されてゐるのであります。われわれ今日のものにまで心をおかれてこの慈悲親切きはまりなき御遺訓を示したもうたのであります。とこしえに闇路を照す法の燈たるこの御遺訓をよくよく身につけて邪義に迷ふことなく、只一向に念佛することが、上人の慈恩に酬ゆる道であります。南無阿彌陀佛。

東北の法然上人像

——眞似牛往生寺を訪ねて——

大 橋 俊 雄

去る年のめつきり秋めいた十月も初旬のことである。青葉の仙臺に宗學大會に侍るべく降り立ち、こゝに兩三日すごした私は、その八日傍ら宗史資料をあさるべく石井教道教授と同道して、眞似牛に向い、法然上人の壽像を拜したのであつた。

途中、時餘のあわたゞしき中に天下の景勝とうたはれる松島を訪づれ、瑞巖禪寺に詣でて、東北文化の一齣をさぐり、けんらんたる桃山式建築の遺構を愛でて、その殿宇の堂々として今日にのこるのを喜んだのであつた。しかし、その美を賞するには餘りにも時間が短かすぎた。同道は石井教授に、青森の梁田氏と私の三人である。

一遍上人が會つて此の邊にまで歩を運び、祖父通信の心情を偲びつゝ、墨染の袖に悲涙を抑へて展墓したことが思ひ出される。その繪詞傳に「弘安三年奥州へおもむ

きたまふ、修業日を送りて地形一にあらず、月は野草の露より出でて遠樹の梢をいとはぬさかひもあり、日は海岸の霧にかたぶきて雙樹のみどりにうつろふ所もあり」と幾度びかの夢を重ねた遊行聖一遍は白河をすぎて、陸奥に入り、松島を愛でて江刺の祖父の墓前にぬかずいたのであり、これを期として集る男女も多く幾つかの草庵をこの地に結んだと云はれ、昨日訪づれた新寺小路の阿彌陀寺もその一であると云うことである。藤澤に居つて、一遍上人を講じたことのある私は、遊行して踊念佛を修して念佛の弘通に一生をさゝげた一遍聖を無性になつかしく感ずる。そしてその念佛弘通の感化の大きかつたことに頭が下るのである。

松島に遊んだ一行は、再び車中の人となつて、陸羽東線を中新田に下車、軌道を加美中新田にすてて、圓タクを拾つて往生寺に向ふ。中新田で阿川教授と會つたのは偶然であつた。せまい町並をすぎ、四釜を経る頃から眺望は次第に廣くなり、車はがた／＼した道を王城寺原にぬけ、花川橋を渡れば前方に遠く低く起伏した山々が望まれ、あたりは廣々とした曠野である。遠くに望まれるコニエデの山を「あれは富士山ですか」と問はれる御仁もあつたが、駿河の富士は今の科學の粹を集めた望遠鏡があつたとしても東奥の地から眺むることは難いであろう。三十分ばかりの後、目的の眞似牛に着し、田圃の間に車をすてて歩むこと數分、九間四面の伽藍をもつ往生寺は丘陵を背景にしてその麓に見へる。

住職の好意によつて本尊法然上人の像が開扉せられ、心ゆくばかりに拜することができた。像は高さ二尺三寸七分を測り、木像で檜

材、上人七十一歳のお像と云はれ、五條袈裟を着け、右手やや高く左手低くして兩手をもつて、念珠をつまみ、うまして居られる坐像で、見るからに柔和の相をたゞへて居られる。

元祖の御影は勅修御傳によれば六つの像が描かれたと傳へられるが、これが今果して残されているかどうかは疑はしい。知恩院の往生要集披講の像や黒谷の鏡の御影、或ひは知恩院の藤原信實筆の御影などがそれであると傳へられているが、時代的に見て最も價值あるものは黒谷の鏡の御影と二尊院の足曳御影、それに茨城常福寺の源空上人の像であり、彫像としてはこゝに安置せられる像があげられる。こゝに元祖の像が置かれるに至つた経緯については面白い傳説がつきまとつて居り、その信仰は今に生き／＼として東奥の人々に受けつがれ、傳説に傳説を生んで春秋の圓光大師忌には遠近よりの參詣者は堂に満みあふれるほどであると云はれる。

元祖の像がこゝに安置せられるに至つたのにはこんな物語りがあつた。鎌倉時代も終りに近い正治建仁年中の頃、奥州遠田の郡に信心深い檀那があつて數年の間、一心に不徳の沙門を供養して居つた。所が或夜、檀那は夢に沙門が「我れ信施をうけながら誦經念佛もせず、素餐の罪業によつて現在畜生道におち、宿債を償ふべし」と云ふをきき、夢さめてあやしみ見れば既に彼の沙門は大牛と變り、その牛農業を助けて其の家、日々に富み榮へたと云う。この話をきいた近くの里に住む栗田郡の欲の深い農夫は、我も沙門がこの地に下向したならば養つて牛となし、富貴にならんとたくらみ、沙門の來るのを毎日待つて居たところ、偶々石垣の金光上人が東北地方に念

佛を弘めるべくやつて來られ、はからずも彼の農夫の家に到つたのである。時に農夫はこれ幸いと「修行の法師、我家に留まり給へ、柴の庵を結びて親切に供養申さん」と申し出た。

それより後はさまざまの食料を送り、且つは其の住房を訪づれ、菩提のためとは露知らず、今日は牛となるか、明日は畜生となれと祈るに金光房は牛とならずに、かえつて農夫が姿を牛にかへてしまつた。金光房はこれをあわれみ誦經念佛してこの災厄をのがれしめんと祈願するところあつたが自業惡念の感報する所すみやかに濟度しがたく、ために彼は上洛して元祖法然上人の許に至り、陸奥に御下向あつて難化の惡人を濟度せられんことを請うたのであるが、時に元祖は「我れ東奥に下らば都の念佛の弘通半途にして止みなん」として自から像をつくりて金光房にあたへ、「この像は我れに異ならず、汝再び奥州にもち下り變牛の農夫を濟度なし給へ」とさとされこゝに金光房は像を背うて下向し、彼の地に至つて農夫に尊像を拜せしめるに數日にしてもとの人身となつたと云はれ、以後農夫は日夜金光房につかへ専修念佛の行者となり、名を正牛と改めた。

後に元祖の尊像は栗原郡に一字を下して、こゝに安置し、箱根山往生寺と號し（承元三年）たが、更に時の領主大崎義隆は寺を加美郡に移して田島を寄せたので一時は東奥の名利とまで云はれたらしく、王城寺原はその遺地であると傳へる。大崎氏の外護もありつゝかなかつたらしく、全くの衰微した時も幾年かついやしたが、それも江戸の時代になつて慶長年中、宗を曹洞禪にかえ、寛文の頃には仙臺保壽寺の靈國禪師が再興して今日の觀あらしめたのである。

參詣の折り、ハツとしたのは一向上人傳の記事で、それにはたしか學牛まなうし往生寺とあつた筈だ。遊行寺にゐるある人は一向上人は假空の人物だと云ひ、その證據としてこの往生寺のないことを一つに擧げて居り、私も一時、全國の寺院一覽でさがしたこともあつたことに氣がついた。それが偶然にも東北仙臺の旅で見出したとは。上人傳には「及言もそれより常隨給事の御弟子となり、名を存阿と改め、翌年（弘安二年）の春、上人と同じく道場を出て諸國修行の後、奥州學牛の往生寺をぞ開基しける」と見え、學牛にはマネウシと振假名がしてあるので、今の眞似牛とは同一所をさすものと思はれるが開いた僧は一は金光房と云ひ、一は存阿と云つてはつきりしないが存阿こそは中興開山であつたらう。

往生寺は禪寺でありながら、本堂の正面には「常行念佛」と記され、堂内には知恩院の曾つての大僧正智儼が書いた「天下上人圓光東漸慧成大師」の額がかゝげられて、勤行は淨土宗のそれによつてなされて居るものらしい。住僧の好意によつて見るこゝができた寶物には、眞似牛濟度の繪圖や變牛の角と尾、或ひは元祖が土佐へ御流罪になつた砌り、念佛の功德によつて海上に出現したと云はれる蓮華などさまざまな珍奇なものばかりであつた。牛と熊には難産なしとか云う因縁でこの寺では、安産の護符を出して居る由うけたまはり、産見の母が飲み下した圓光大師のお護符と云ふものも見せていたゞき、話はそれからそれへと續いて何時盡くるとも知れないが、車を外に待たせてあるので、お護符と寺の縁起とを頂戴して山門を後にした。

車中の人となつても、元祖の念佛の聲が、この東北の邊陲の地まで、今に信仰となつてゐることを喜ぶのであつた。西北方にそびゆる藥來おろしは身をつきさす許り、黄昏も近い頃一行は中新田に着いた。途中石井教授と今日、日を延ばして平泉の中尊寺に詣でた。いとも話し合つたが、明日の授業もあるのでまたの日を期して斷念し、一行とは仙臺で別れて歸途に着いたのであつた。

三心聖句抄

偽はらざる心を以て、佛の本願を信じ、まさに往生せんと欲す。是を三心と名づく。もし欣求の心無ければ、知ると雖も具せず。もし欣求の心あらば、學ばざれども自ら備はる。（記主禪師）

三心と云へる名は、各別なるに似たれども詮ずるところは、たゞ一向專念と云へることあり。一すちに彌陀をたのみ、念佛を修して余の事をまじへざるなり。

（法然上人）

三心と云ふは一心なり。一心といふは、たゞ願力をたのみて、いさゝか疑わざる心なり。うたがわざる心になりおほせぬるうへには、たゞ唱ふる外には別の子細なし。（隆堯法印）

私の浦島太郎

藤 田 寛 雅

病氣で身動きもならず寝ている子供に、お話をせがまれたり、童話の本を読んでやつたりしながら、私は自分が子供だった頃に、私たちをとりまいていた『お伽噺』の世界が、まことに色褪せてしまっているのをつくづく感じないわけにはゆかなかつた。いくどもく飽きもせず、聞いたり讀んだりしたカチカチ山や一寸法師、舌切雀などの話も、さて自分の子供に、という段になると、もうくり返して再びこうしたお伽噺をしてやるには、いまの子供はあまりにも、童話的世界に囲まれている。大きな斷層というか、そうしたものがこうしたところにも來ているのを感じる。

しかし私は久し振りに、子供はつまらなそうな顔をしていたが、自分たちが育つたお伽噺の世界を想ひ浮べ、反芻しているうちに、變なことに氣が附いた。そしてとりとめもない想ひに耽り始めたのだが。

花咲爺さんは、よいお爺さん、わるいお爺さんが活躍をする。舌切雀には欲深かなお婆さんが出てくるが、お爺さんは氣質のやさし

題にならない。とにかく善いものは善いという、一本道が走つてい。それなのに浦島太郎は違ふのである。他のお伽噺のようには割り切れないものがある——のにお氣付きでせうか。

浦島さんは、青年血氣のさかんな年頃なのだが、子供にいちめられてゐる龜を助けてやつた。今のあの年頃なら、きつと、子供を煽動して、もつと残酷なやり方で龜をこづき廻して喜んでいたかも知れない。でなければ、子供から龜をうまくとり上げて、之を種に一儲けでも考えたかも知れない。だが浦島青年は、戦後派ではなかつた。龜を助けてやつたのである。——動物愛護の精神において、まことに見事である。こうした心の持主なのだから道に捨てられた犬や猫の子を助けてやつたこともあろう。その日頃の生活でも、きつとやさしく、けた外れなこととはしなかつたであらう。浦島君は未婚の青年である。丹後風土記をみると、「人となり姿容うるはしく、みやびやかなること類ひなかりき」と記しているから仲々の美青年であつたかも知れない。珍しい人物である。しかしそれなのに、お伽噺ではどうだろうか。

いものである。こうしたお伽話には、はじめから、善と惡とがくつきりと現われて、黒と白との結末がはつきりと出てくる。まことにその點、明快であり、直線的である。意地惡な猿は蜂や栗にとつちめられるし、性惡の狸は、兎にいやという程、しめあげられる。兎のやり方はしつこい位だが、そんなことは問

だから、龍宮へ行つて楽しい生活を味つてきたではないか、——
 と言うかも知れない。たしかにそうに違ひない。龜を助けたその心
 情が、彼を龍宮に導いたのだとしたら、もうそれだけで好いものでは
 ないだろうか。ところが乙姫さまが土産にくれた玉手箱。龜に送ら
 れて故郷の濱に着いた。さて開けたとたんに、

タチマチ、シラガノオヂイサン

これでおしまひである。

他のお伽噺、私たちの子供時代に親しんだどれとでも較べてごら
 んなさい。浦島太郎のおしまひほど、また私たちを煙にまくものは
 ない。浦島君は、お氣の毒に、馬鹿な目にあつた、と言いたくなる。

有名な萬葉集にも、「水の江浦島の子を詠める」歌があるが、作者の
 高橋虫麿も、こうした浦島君を「世の中の愚れたる人」と考え「鈍
 やこの君」と詠んでいるのも無理はない。どうしてもそんな氣にな
 る。玉手箱あけなきやよかつたのに、つまらないことになつた。ど
 うもこのおしまひの所でひつかゝつてくる。こう思ふのは、あなが
 ち私だけではないでせう。きつと皆さんの中にも、おかしいと思
 われた方があるかも知れない。一體これはどうしたことだろう。「そ
 れに就いて永い間思索した」が「やうやく少しわかつて來たやうな
 氣がして來た」と、作家の太宰治は彼の「浦島さん」で述べていま
 す。

つまり私たちは、浦島が三百歳とかの、タチマチ、シラガノオヂ
 イサンになつたことが浦島にとつて不幸であつたといふ先入感に依
 つて誤られて來たのであり、繪本にもそれからの浦島老人が實に悲

慘な身の上になつたものさ、氣の毒だ、など、いふやうなことは書
 かれていない。氣の毒だ、馬鹿だ、など、いふのは、私たち俗人の
 勝手な盲斷に過ぎない。三百歳もの老人になつたのは、浦島にとつ
 て決して不幸ではなかつたのだ。浦島は、立ち昇る煙それ自體で救
 はれているのである。

曰く。——年月は、人間の救ひである。

忘却は、人間の救ひである。

思ひ出は遠くへだゝるほど美しいといふではないか。三百年の年月
 と忘却、——日本のお伽噺には、このような深い慈悲がある。浦島
 は幸福な老人として生きたといふ。

玉手箱の煙に、年月と忘却とを觀たこの浦島さんは、その老生活
 を幸福に生きたとしても、私は淋しいと思つた。年月と忘却——私
 たちもまた、そうした中に生きている。渚に沿つて歩いてゆく私の
 足跡は、砂地にどの様に深くしるされたにせよ、波は一擧に、ある
 いはしづかに洗ひ去つてゆく。顧みれば、長砂の渚には波がよせて
 は返すだけである。些末に喜び、一瞬に悲しみつゝも、年月の波は
 全てを忘却の海底にと洗ひ去つてゆく。そこに人生のひとつの姿が
 ある。だがそこに、忘れることに救ひを感じなければならぬこ
 とは淋しいことだと思つた。

忘却が救ひであることも、たしかである。だが一面に私たちは、
 美しいものを何時までも寶石の如く大事に胸に抱いていたいと思
 ふ。不幸にもその美しい想ひ出の種が、深く自分の胸を苦しめるも

のであつたとしても。忘却は生々しい苦痛を取り除いてくれるかも知れない。しかしまた烈しい生の歡喜をもぼかしてしまふだらう。歡喜と苦惱と、この二つのものを引離すことの出来ない生の歩みがある。人生の無常がそこにある。無常とは、たゞ萬物が流轉し變移するということ、恒常永遠のものが無いということ、それだけではない。無常とは苦と相關し、從つてまた絶望とさえ相關する。私たちは日常の生活に於て必ずしも無常を自覺しているとはいえない。日常の生活に無常を感じない。富や名譽を一瞬に失う世間の例を見聞しても、それは他人事であり、死もまた自分だけは例外であるような氣持で、世間的なものの追求に汲々として深くその行爲の奥を反省し眞實を見つめることをしない。このような日常の生活が永續し、之が生活の唯一の仕方であるならば問題はない。しかし、このような日常は、日常そのものの中から破綻を生じてくる。破綻はその大小を論ぜず、いつ、どこからとなく、我々の脚下に深淵を開いてくる。人生のこのような破綻、無常、その自覺が、われわれの心をつよく日常の自己から、眞實の自己へと向わしめてくれる轉機をなし、眞實の世界、清淨の世界、永遠の世界が求められ、宗教の世界が開かれてくる。

浦島の玉手箱は、その煙は、この人生の無常に他ならない。タチマチシラガノオヂイサンであることこそ、浦島が、この人生の眞實の相にふれたことを物語つてゐる。時の流れ、年月の變轉は、單に忘却を指すのではない。むしろそこに無常の姿を知らしめるものがある。「無常」にふれるものこそ、「常」にふれることが出来る。時間

の世界を知るものこそ、永遠の世界を知ることが出来る。玉手箱は、われわれの人生の底にあるものを秘めてゐる。玉手箱を開くものにとつて、「永遠」は與えられる。私たちもそれぞれにこの玉手箱をもつてゐる。私の浦島さんは無常にふれた老翁であり、そうした浦島さんの生活であつて初めて、永遠の龍宮が生きてくる。忘却ではないのである。私の想念は段々と永遠と時間ということに傾いて行つた。

私はいつかこんなことを考えていた。浦島さんの晩年は忘却によつてではなく、宗教的に救はれたと。

黙つてゐる私に、ボツリと臥している子供が言つた。

アタイハ、シヤワセダネ。

私はハツと子供の顔をみた。何ヶ月を病床にゐるこの子は、何を思つてゐるのかと、とつさの返事に窺して、「そうだね」とあいまいに言う他はなかつた。だが、子供ははつきりしてゐた。

死ナクテ、スندانダモノネ、

誰も子供に死を語つたことはなかつた。しかし子供は、その心でふかく死生の問題にふれてゐた。

この子にとつて人生の玉手箱はどのように開かれてゆくのかと、私はただ、念じるの他はなかつた。

法然上人の映画

須藤隆仙

私が未だ小學校に通つて居る頃、關西から偉い布教師さんが來られると云ふ。其の布教師さんは、傳道のために映画を持つて來られるとの事だつた。

映画は映画館でしか上映出来ないものと思込んで居た私は、お寺で映画をやると言ふ事に半ば興味をもつてお寺の山門をくぐつた。

其の時の映画は「法然上人の御一代記」であつた。映寫機も相當古い型のものらしく畫面は始終サラ／＼と動いて目がチラ／＼したのを今でも覚えて居る。だが其れにも増して最も私の胸に深い印象を與へてくれたのは、其の映画のストーリーだつた。

それは、元祖様が出家せられる以前の、即ち勢至丸様の時の、源内武者定明の夜討から始まるのである。當時九歳の勢至丸は、父、

時國が危機に瀕して居るのを目撃し、小さな弓に矢をつがへ、心に「弓矢八幡大菩薩」を念じつゝ、定明の眉けんを射るのである。

怖ろしい人間葛藤の血生臭い場面はやがて消え、次いで畫面は時國臨終の場と變る。無聲映画であるから、セリフが合間々々にスクリーンに書き表はされるのであるが、其の時、時國が勢至丸に遺す言葉の中に、
『怨みに酬ゆるに、怨みをもつてせば、怨みつきることなし』

との言葉がある。

今でもはつきりと其の白く書き表はされた文字を頭の中に描く事が出来る。正確には覚えて居ないが、だいたいの遺言は、

「もし敵人に對して、遺恨を結ぶならば、其の仇は永久に絶える事がないであらう。早

く俗界をのがれて、出家し、我が爲には菩提を弔ひ、又自からの爲に解脱を求めよ。」と言ふ意味だつたと思ふ。

○
先年、私はお寺に遊びに来る子供達に、騰寫版で臨終の床に端坐合掌して遺言を述べる時國と、其の側に伏して遺言を受ける勢至丸との畫を印刷して、其の上に「怨みに酬ゆるに、怨みをもつてせば、怨みつきることなし」と書いたカードを與えた事があつた。そして其のカードの畫に見とれる子供達に、勢至丸のお話をしてやつたのである。小さいうちに親を失ふ勢至丸に同情したのか、あるいは其の物語りの中に流れる深い意味に感激したのか、子供達の中には目に涙を一ぱいためて聞いて居る者が多かつた。少し哀れつぽい話をする、すぐ泣く女の子の良くありがちな態度ではなく、其の時は男の子も涙ぐんで居た事に私はかえつて胸を打たれたのである。

○
あの映画が與えた印象には、もう一つ深い事があつた。其れは、父の遺言通り、やがて勢至丸は出家するが、菩提寺の院主、歡

覺得業の室から比叡山の持寶房源光の許、次いで功德院、肥後の皇圓阿闍梨の門と、約十年の間、佛の教を學ばれ、十八歳の時、更に西塔黒谷の慈眼房叡空上人の草庵を叩くのである。——説明する布教師さんは「上人十九歳の御時」と云はれたから、多分この黒谷の叡空上人の草庵での出来事と思ふ。

ある晴れた日に、庵の縁側に坐して經本を前に一心に勉強されて居る上人の目がハタと向の林の方にむけられる。畫面はグルリと方向を變えて林の方をだん／＼と大きく寫し出す。五、六人の人影が林の中にうごめく。一人の旅人風の男を取りまく四、五人の荒武者——おいはぎである。

やがて其の場はボォーッと暗く消え、今度は其の林と正反對の藪の中に、二、三羽の鷄をブラサゲて狐の如くに姿をくります男が寫し出される。——泥棒である。

暴力をもつて人々をおびやかす、衣服、金銭はおろか生命までも平氣で奪い取る恐ろしい悪人——。

人目をさけてカツバライに人生を過す罪人——。

唯、亂れ、濁り、腐れ、荒れ果てた當時の世相の一端をとらえた場面は再び消え、この有様を目的の當り御覽になつた上人の姿が次に寫し出される。

其れは靜かに目を閉ぢて、やゝ空を仰ぐが如くに端坐されたお姿であつた。

此の濁つた世を憂える上人の御心は、瞑目の面にあり／＼と表はれ、端然と坐られたお姿には、出離生死の道を求めんとする無限の求道心が満ち満ちて居た事は今でも私の腦裡にしつかりと燒附いて居る。

勿論映畫であるから役者が演じて居るのであるが、私には目をつむり、やゝ空を仰ぐが如くに坐して居られる上人の御姿を役者ではなく本當の、ありし日の上人だとより思へなかつた。

○

あの映畫は有難かつた。七百四十年の昔、既に、お淨土へ往生された上人を、此の目で拜する事は、木彫の御像や、肖像畫でより出來ない。だが動くお姿を拜ましてくれたのは

映畫であつた。一昨年新橋演舞場で倉田百三の『出家とその弟子』が上演された。あの時

も山村聰の扮する親鸞上人を、私は本當の親鸞上人だと思つた。其の後で「母棒」か何かの映畫で山村聰を見たが其の時は親鸞上人ではなく唯の山村聰であつた。

後で聞いた話だが法然上人の御一代記の映畫も、やはり當時の一流の役者が演じたのだと言ふ。だが私はあの役者を通して本當の上人を拜まして頂いたのである。

偶像崇拜と言つて、お掛圖や佛像に掌を合せる人を激しく攻撃する人がある。

此の人達に言はせれば映畫や演劇を見て、本當に活きた上人を拜んだ等と言ふ私は、やはり妄想のかたまりであり偶像崇拜と同じ心理であると言ふかも知れない。然し私とても其れを演じて居るのが役者であると言ふ事は充分に知つて居る。だが其の役者の最も奥にあるもの、もつとも眞實なるものを拜んだのであるから、其處には廻りくどい理屈等の介入する餘地はないのである。

現代の様に高い教育が普及されて居る世の中で、紙や木を幻覺で、あるいは迷信的なもので拜んで居る人は少ないと思ふ。お寺の御

本尊が木で作られて居る事は、小學校の子供でも知つて居る。だが其の木を通じて本當の佛を拜むのである。

偶像崇拜等と言つて得意げな顔をして居る人が夜ひそかに戀人の寫眞(紙?)に接吻したりして居るのは笑止千萬な話ではなからうか。良く引用される蘇東坡の詩に「溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身」と言ふのがある。谷川の流は佛の説法の聲であり、山のすがたは佛の御姿であると言ふ意味である。

正直に言つて未だ私等は其の様な氣持にはなれないが、然し像や繪、あるいは映畫、演劇等を通して佛や、又偉い上人のお姿を拜み聲を聞く事とはどうやら出來得る。

亡くなつた肉親の位牌を通して、其の魂と通じ合えるのも嬉しい限りではなからうか。

○

私は思つた。小學校の頃、お寺で見たあの映畫の特に印象深かつた一駒を、現代の世相と照し合せたら如何かなものであらうかと。

「怨みに酬ゆるに怨みを以つてする事なかれ」と言つて怨讐の彼方に我が子を導いた元祖上人の御父時國公の御言葉――。

強盜、泥棒、亂濁の世に靜かに瞑目される元祖上人――。

おいはぎや泥棒に變るものとして、(勿論現在、おいはぎや泥棒は尙一層多いが)、もつとく恐ろしいものが横行して居る現代に、私はふかくこの言葉を想ひ、法然上人を慕ふ。

(終)

早春の登音

はれとほる眞冬の海のいろふかし帆を張る舟は動き居らむか

海に向ふ街の日ざしや冬もなからむつましき思ひ動くに

(今井邦子)

山みれば雪残れども夕づく日玻璃戸のそとを虫すでにとぶ

春いまだ田は鋤かねども堰のみづ分れひかりて山蔭へみゆ

(中村憲吉)

會友通信

日一日と寒さもきびしくなつてまいりました。いつも「淨土」をありがたく拜讀させて頂き、生活の上に、社會の上に、深い信念をもつて、強く明るい一日を、精進させて頂いております。「淨土」を愛讀させて頂くようになったのは、主人の健在中からで、もう十五年以上かと記憶しております。この「淨土」がつづく限り、私の生命のある限り、讀ませていただきます。

(延岡川原崎教會所・高久欣子)

新年號、阿川貫達先生の念佛生活、年のはじめにありがたく拜讀させて頂きました。私も六十四、あやかりたく、お念佛に明け暮れております。諸先生方の御意、田舎に居てありがたく、御誌の届きます日を楽しんで居ります。こゝのところ、何時も月の終りでなければ拜見できませんのに、今月は早くにつきましてほんとうに嬉しく思わず合掌いたしました。發行日が正確になつてまいりますのに先づよかつたとホツといたしました。

(千葉・矢野ふみ)

伯父が健康を害していると言うので、歸郷のついでに伯父の家を訪ねた。玄關に入つてゆくと念佛の聲が聞えてくる。大分悪いのではないかと、ハツとした。寢室へ入つてゆく

と案に相違して、伯父は布團の上に坐つたまゝ珠數をつまぐり乍ら念佛を稱えている。傍には漁網さえ置いてある。私の入つてゆくの認めて念佛を止めた。

「有難う、よく來て呉れた」
との一言を述べてから近況をボツ／＼と語り出した。

「夏病氣の爲床に伏してからは何も考えない

ことにしている。法然さまは日に六萬の日課を申されたと言うことを聞いている。私は六萬は申せなくともせめて五萬の日課はと思つてやり出した、四五日は五萬遍を申したが五

伯父の信仰

新保義道

萬遍の日課は何よりもつらかつた、朝飯の箸をはなしてから夜おそくまで絶え間なく申さねば五萬と言う數は申せない。どうも之は私には耐えられないので今では日課を二萬と言

うことにしている。尙横になつたり、仕事をしながらの念佛はこの數の中には入れてない。

と、私は之を聞いて嬉し涙が出て來た、之以上何も言う言葉がないので、

「せい／＼お念佛を相續して下さい」と言う、又語を續けられる。

「私が體を悪くしてから、家の者や親戚の者が色々に心配して御祈禱師や占師を頼んで來てくれる。その人達が私の部屋に入つて來ても誰かが申し合せたように何も言わずに出ていってしまう。自分も變だなあ

と思ひながらも強いて家の者に聞こうともしなかつた、それが最近聞くとところによると、『あの爺さんには何を言つても聞いて貰えないし、又みることも、おがむことも出來ません』と皆が言つていたそうである。私は念佛を申し立てれば何もして貰わなくてもよい、惡魔も來なければ、祈禱師や占師もいらないのである。」

と、そこで私は法然上人の御法語を引いて、『本當に伯父さんの信仰こそ正しい信仰で、法然上人のみ教の通りです。』と、法然上人の御法語の

『彌陀の本願を信じて念佛して往生を願ふ人をば、彌陀佛よりはじめたてまつりて、十方の諸佛菩薩、觀音勢至無數の菩薩この人を圍繞して、行住座臥、よるひるをもきられず、かげのごとくにそひて、もろ／＼の横惱をなす惡鬼惡神のたよりをはらひのぞきたまひて、現世にはよこさまなるわづらひなく、安穩にして、命終の時は極樂世界へむかへ給ふ也。』

されば念佛を信じて往生を願ふ人は、ことさらに惡魔をはらはんために、よろづのほ

とけかみにいのりをもし、つゝしみをもち
る事は、なじかはあるべき、いはんや佛に
歸し、法に歸し、僧に歸する人には、一切
の神王、恒沙の鬼神を眷屬として、つねに
この人をまもり給ふといへり。しかればか
くのごときの諸佛諸神、圍繞してまもり給
はんうへは、又いづれの佛神かありて、な
やまし、さまたぐる事あらん。

又宿業かぎりありてうくべからん病は、い
かなるもろくの佛神にいのるとも、それ
によるまじき事也。いのるによつて病もや
み、命ものぶる事あらば、たれかは一人と
して病み死ぬる人あらん。いはんや又佛の
御力は、念佛を信ずるものをば、轉重輕受
といひて、宿業かぎりありて、おもくうく
べき病を、かるくうけさせ給ふ。いはんや
非業をはらひ給はんことましまさざらん
や。』

と訓されてあるのを申して、
「どうか今の信仰を變えずにお念佛を相續
して下さい。」

との言葉をお見舞として病床を辭した。
本人は現在に寝ておらねばならぬ程の病人

でなく、外へも出れ、ば或る程度の仕事も出
来る體であるが、^{あし}年令はとつてゐるし、この
病氣を機會に、外に出て人と話をする暇には
念佛を申し、その合間々々には生きさせて貰
つてゐる御禮のしるしに、漁網のつくろいを
してゐるとのことであつた。

元來宗教は煩惱や欲望から超脱し、眞實の
安心立命を得る爲のものであり乍ら、人は往
々にして宗教を現世利益即ち無病息災、金儲
け等の目的のものたらしめてゐる。併し利害、
打算的に神佛を信仰すると言うことは本當の
信仰でもなく、又本當の宗教でもない。

或る盜賊が殊勝にも盜品の一部を神様に捧
げ、「何卒惡事の露顯しませぬように」と祈つ
て居つた、ところがこの神様に捧げた盜品か
ら足がついて神様の前で捕えられた、すると
この盜賊が「この神様は御利益のない神様だ」
と言つたと言ふことである。

之は單なる笑話であるが、之と同じような
祈りが如何に多く世の中に行われていること
であらうか、

「病氣を癒して下さい」「お金が儲かりま
すように」「災難にかゝりませぬように」

と祈つてゐる。

病氣を一日も早く治りたい、貧乏はいやだ
災難から免れたい、と言う人間の我儘な祈り
である。このような人間の弱點につけこみ、
人間の功利心を故意に利用せんとした迷信的
な信仰が多くある。人間は肉體と精神とが不
二のものであるところから、精神の置き方が
肉體に影響しそれによつて病氣の治ることも
あり得るが、それは祈つたから治つたのでも
なく、神の力、佛の力で癒つたのでもない。

我々は正しい祈り、正しい信仰によつて、
正しい人生を送らねばならない。日課五萬、
六萬の法然上人のお念佛は「佛に自己を打ち
まかせんとする純粹の祈り」であつた。全身
全靈をみ佛に打ちまかせたところに、あの源
平争亂の不安な時代に於てさえ「生けらば念
佛の功つもり死なば淨土へ参りなん、とても
かくても思いわづらうこともなしと思ひぬれ
ば、死生共にわづらいなし」のたくましい人
生があつたのである。私達の念佛、祈りも亦
み佛に自己をうちまかす心でなければなら
ぬ。そこに自ら新しい世界が開けて來るので
ある。(筆者本會々友)

七福神を訪ねる (その二)

佐藤 密雄

辯天と毘沙門

七福神には最初は紅一點として天鈿女命即ち「お多福様」が参加して御出になつたのであるが、近江の竹生島に辯天様が出現されてから、お多福様に代つて辯天様の出席となつたのである。辯天様は印度の辨天河(サラスバチ)の精で、音楽の神様である。諸人が信仰申上げるに従つて辯舌も上手に、才能も豊かになり、文字通りの辯才天となられた方である。佛教に便乗して日本に御出になつてからは、欲深き者共が信仰申上げ、失禮をも省みず、改名を御願ひして辨財天となられ、今日本に御出になるのはほとんど此の財を辨じ給ふ女神である。そして此の改名辨財天の日本の本山は竹生島である。

經典には辨才天女は「面貌容儀人を觀ると樂む」とあるし、亦「端正見るを樂しむ満月の如し」とあるから容貌端麗の程は察すべきで

あるが、然も威神力赫々で、若し此の天女の前で最勝王經を讀み上げると、智慧は得られ辯説は鮮かになり、苦患をなくして頂ける。更に、財を求めれば財を與へられ、名聲を求めれば名聲を授けられるのである。

大黒様は御寺の臺所に一番多く御住ひになるが、辯天様は島や水邊に多く御住ひになる。印度の辨天河の出身の爲でもあらうが、竹生島へ龍に坐して出現されて以來、日本の海邊水邊の神様を辯天様に改神したのも澤山あるからだと言はれる。裸辯天で有名な江島辯天は文覺上人が竹生島から勧請したもので、竹生島と嚴島と江島とが日本三大辯天でいづれも島にある。そして此の三大辯天がほとんど一樣に神體が蛇身であると信ぜられて居る。江島辯天の如きも、北條時政參龍の時に神體白龍となつて示現されそれが海中に入つた跡に鱗が三枚遺つて居たので、爾來北條氏の紋が三鱗になつたとも言はれている。

辯天と同じに印度神であるのが毘沙門である。此神は世界の四方を護る四天王の一人で北方の守護神であるが、同時に財寶の神でもある。四天王としては、聖德太子が四天王寺を立てられて以來、日本國では諸方に四天王を祀つて國の護りとされたが、民間人は此を財寶の神として祭祀したのである。辯天様は佛教に便乗して日本に入つたが、佛教のみに止まらず、嚴島神社江島神社等と日本神道の宮の祭神になつて居るのが多い。毘沙門天は大體佛教寺院に止ま

つておられる。

此神も辨天と同様に、金光明經がお好きで、此れを讀み上げると種々な財寶を授け下さるのである。又毘沙門功德經と言ふ偽經があるが、此に依ると、正月の元日から三日間、身を清めて東北方に向つて「南無毘沙門天王」と稱え念ずると、大福德を得ること「決定して疑ひなし」と記されてある。梅津長者物語には「鞍馬の毘沙門天を頼み給ふに、多くの眷屬を引具し、惡魔降伏の相を現じ、劍戟を飛ばして狩り立て給へば、貧乏神ども恐れをなし、四方八方逃げて行く有様、嵐の訪ふ木の葉の如し」と記されてある。貧乏神に取つかれて居る人は鞍馬へ御参りすべきである。然し毘沙門様の御使は蜈蚣（むかで）であるから御参りには要心せねばならない。

二 壽と布袋

七福神の中で、中國出身者は福祿壽と壽老人と布袋和尚の三人である。此の中初の二壽は、星に對する道教的信仰から出たものである。福祿を司る星が南天にあつて、此を福祿壽星と名づけるが、中國の宋代の元祐年間に、此星が南極老人として世に現はれたと稱えるものがあり、瑞兆として人々を喜ばせたのである。然し此は道教的虚談から蓬萊山に藥を求め、仙人となり長生不死を求める思想が生じ、やがて畸人を福相となし、奇形を瑞相となすに至つたものである。

風説に基いて南極老人を長頭短鬚に畫いたのが福祿壽であるし、更に異つた様子に畫いたのが壽老人である。全く異つた壽像が二種

流行して、やがてそれが二つの壽星と二つの壽星人ありし如くに思はれた爲に二老人の成立となつたのである。此の二老は福神と言ふも福を授けるのではなく、壽福萬々の相を持つ目出たいもの、言はゞ高砂的存在である。

七福神中で唯一人の實在の人間は布袋和尚である。中國明州奉化縣の出身で、唐末の人である。長汀子布袋と稱したが、常に杖を持て布袋を負ふて歩き、凡そ身に供せられたものはすべて此の布袋に貯へて、定住なく放浪乞食して居た。人に吉凶を預言して誤ることがなかつたと言はれ、又、禪問應答する時は、最後に「我れに一文錢を與えよ」と結ぶを常例としたとも云はれる。然し此の貧寒な僧が、貧寒の中を便々の腹鼓を打つて悠々と生きたことが、彼の死後有名となり、宋代には畫像となつて日本にも傳へられるに至つたのである。それが禪の榮えた室町時代の日本の文人貴人に好ましい話題ともなつたのである。眞の幸福は無所得にある。貧寒に徹した布袋和尚の、満腹の笑ひが眞の福である意味で、此を七福神に入れたのかも知れない。そして七福神の七人の選定には禪僧の考へが加つて居たのかも知れない。若しさうであるとすれば三國四宗教の福神コンクールに於て、最後の三つの鐘を鳴らすもの「其れ布袋ならんか」である。（おわり）



迷いの心

竹 中 信 常

私共の日常生活の中には、随分「まよう」ことがある。「今日は少し寒いがどの着物を着て行こうか」とか、「電車にしようか、バスで行こうか」といつたことから始まつて、商賣上の馳引や、取引相手の信用の問題その他、大袈裟にいうなら、朝起きてから夜ねるまでの生活が、すべて「どうしようか」「こうしようか」といつたまよいの連続である。

このように私共の生活は迷いの連続であるが、その迷いにも色々ある。分けてみると、物質的な迷いと人間的な迷いとである。物に拘わつて色々と迷うのと、精神的に色々に迷い悶えるとのことである。一方は物質的な、いわば低級な迷いである。デパートで一枚の着物を買うのに澤山の中から氣に入つたのを二つ三つ選び出して、さてその中のどれか一つに決めねばならぬ。二三枚の着物をあれこれと決めかねている。これが物質的な迷いである。人間的な迷いというのは、年頃の若い男女が、その相手の氣持を色々に想像して、どうだろうか、こうだろうかと思つて迷う場合、或は人生とか宇宙とかいつた大きなものに對して、色々な迷いを感じるというつた場合である。いづれにしてもそれが「迷い」であることには變りがない。そし

てそのような心の起つて來るのは、その對象に同じ價値を認めるからである。バスで行つても電車で行つても結局は同じ處へ行くのであるが、電車の方はすいているし餘り揺れない、だが時間がかかるバスならば時間は早い。然し揺れたり混んだりする。ぢや一體どちらにしたらいいかということになる。良い處と悪い處とを相殺するといづれともいえない。そこで迷う。ところが此場合、時間で人に會うとか汽車の時間に間に合いたいと思う人は電車などには見向きもせずバスの方へ行く。自分の立場が決まれば迷いはなくなる。こうと思えば眞直ぐに行くことが出来る。どつちにしようかと考えるのは、どつちでもいいからである。自分の立場または態度が決まらないからである。

日常生活の場合、このように自分の立場をはつきり決めて生活して行くなら、物事はすべてテキパキと片づいて行く。世間ではこのようにして行く人を「自信のある人だ」とか、「さつぱりした人だ」とかいう。傍で見えていても氣持がいい。だがこれでいいだろうか。成程、自分の立場なり態度なりをきつぱりと決めておくことは大切である。がその前にもう一つ大切なことがある。即ち、自分の立場

なり態度なりを誤りなく決めること、正しいか正しくないかをよく批判してみることである。そうでなく、眞向から、批判もせずに自分の立場を決めてしまつて、それをあくまでも押し通すなら、うまく行つてゐる間はよいとして、ひと度潰くと大變なことになる。そうなるとう今度は世間では、「自信の強い人だ」とか「私の強い人だ」とか更には「横車を押す人だ」とさえいうようになる。

全然迷いのない人、それは良い意味でも悪い意味でも『人間』ではない。良い意味ではその人は迷いのないという點で既に佛であるからである。佛即ちさとれる者は迷いを脱け出た人だからである。悪い意味では迷いのないということは動物と異りがないからである。犬や猫は本能の命ずるままに動いて迷いが無い。迷いを知らぬ人も矢張りこれと同じである。佛は迷いを脱け出たのであつて、脱け出る前には深く迷つたのである。迷つた擧句に悟られたのであるから、その立場には誤りがない。迷うことを知らずに自分勝手に立場を決めてしまうのとは大變なちがひがある。

このように迷いのない人は非人間である。病氣をしたことのない人に健康のありがたさは分らない。人間が眞の意味での人間、犬や猫とは異つた人間であるためには病氣もせねばならぬし迷いもせねばならないのである。

ところが現實はそうでない。鐵人山を見ずの譬のように、私共は迷いの中にあつて迷いを知らない。成程、動物的な、物質的な迷いは常に経験しているかも知れない。が然し、人間としての、眞の意味の迷いはこれを體驗する人甚だ少い。

昔、或る國に一人の物持ちがあつた。無限の財産と廣大な屋敷を持つていた。子供達も澤山にいた。たま／＼近所の家から火事が出て、あたり一面が火事になつた。その物持ちの屋敷の周圍は土塀で圍まれていて、門は唯一つしかなかつた。塀の中では子供達が何も知らずに喜々として遊び戯れている。物持ちはこれを眺めて、何とかして、子供達に火事の愕きを知らさずに門外に逃がし出さうとして、門の外に立つて色々に言葉を盡して手招きした。だが子供達は遊びに夢中になつてこれに耳を藉そうともしない。火は段々と燃えさかつて危険が迫まつて來た。そこで止むを得ず方便を以つて子供達を導いた。「さあみんな、遊びをやめて門の外へ出て御覽。お前達の大好きな色々の乗物があるから、これにのつて遊びなさい」子供達は此聲をきくと歡聲をあげて門の外へとび出して來た。

これは法華經譬喻品に説かれてある有名な三界火宅門の譬えであるが、佛の目からみた私共人間の姿を現わしたものである。まわり一面、火にかこまれてもこれを知らず、遊び戯れている。私共の生活の周圍も一歩深く掘り下げて考えてみるならば、争ひ、恨み、憎しみ、怒り、その他諸々の災惡に満ち満ちている。それは心づかずに、日々の生活に追われているようすは全くこの譬えの通りである。そこには迷いはあつてもそれは眞の迷いではない。ただ自分のまわりの極く狭い範圍の、日々の生活に即した偽りの迷いである。自分というものを中心とした、自分の利害と結びついた迷いである。このような迷いはいくら迷つても何の益にもならない。一つの迷いを脱け出たところでまた次の迷いに襲われる。はてしなく次々につ

づく迷いである。それは、その迷いの中心に「自分」というものがあるからで、この「自分」をなくさない限り、迷いは永久に續いてゆく。眞實の迷いとはそのような自分とか他人とか、あれとかこれとかいつた淺薄なものではない。もつと根底から湧き起つて來るものである。古くは佛陀釋尊に始まり、下つては各宗の祖師達が體驗された迷い。人生そのもの、人間全體につらなる大きな、そして深い迷いである。自ら迷つていると意識しての迷いである。自分というものから脱け出して、一段と高いところに立つて迷いを知らずに愚かしく生きてゆく人々の姿を眺めての迷いなのである。迷いの中にあつては自分で迷つていることが出來ない。自ら迷つていると知つた瞬間それは既に迷いを脱け出たことになる。火にとりかこまれていても、それと知らずに遊んでいる子供達には迷いはない。門の外からこれを眺めると始めて迷いが出て來る。金剛三昧經(入實際品)に「心に妄なくば三界なし」といつている。妄は迷妄の妄で、矢張り迷いである。迷いがなければ三界即ちこの娑婆世界も現われては來ない。迷つてこそ、この娑婆世界が浮世であり、苦しみの世界であることが知られる。而も、このように娑婆世界を、苦しみと惱みの世界と觀するには、此世界から一步抜け出てみねばならぬ。迷の中で遊びたわむれる子供達を門の外から眺める父親、自らの迷いを知らざる迷える者を眺める者、これが佛教者の生活である。ここに始めて、迷わざる立場で迷える世界に生きて行く事が出来るのである。

法然上人は自分自ら煩惱具足の凡夫であるとはつきり自覺され

た。迷い悩む凡夫であるからこそ、それを脱け出して往生成佛をすることが出来るのである。一休禪師の歌に

釋迦といういたづらものが世に出でて

多くの人を迷はするかな

というのがあるが、釋尊こそ、私共に眞に迷うことを教えられたのである。迷いのないところには悟りは決して生まれて來ないのである。(つゞく)

(NHK佛教放送原稿)

自殺と佛教

終戦後自殺が多い様である。誠に悲しむべき現象である、その原因は終戦による思想の困亂のみが原因ではない、この事はかなり思想の安定してきた現在にあつても多いからである。この原因の經濟的面は直接宗教界の責任ではない、この面の責任者は大いに反省せねばならぬ、人間の本質にかへつて生きる權利、尊さ等を考へる時、何人も終戦の必然の結果として葬り去ることはゆるされない。

自他の力のすべてを菩提に廻することを主張する佛教が自殺に反對することは、殺人を否定すると同じである。病氣、惡經濟狀態其他自殺や一家心中をせねば必然に來る一層悲痛な事態があつても、佛教徒は最善をつくして、自然死を待つより他に道はないのである。この道が日本人一般の歩むべき道であるなら、吾々は念佛でもつてこの道を歩く。そして始めてこれが生きた現實の「白道」となる。惡條件と悲痛にまけてはならない。淨土の行者の道は常に白く輝いている。(松濤)

浄土の會員を

一人でも多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年一三八圓、年額二

七六圓です。

◇會員には毎月「浄土」を配布

します。

◇この會はみなさまの會ですか

らその發展のために、お一人

でも多くの會員をつくつて、

正しい信仰運動をひろめませ

う。お知合の方々にぜひおす

ゝめ下さい。

◇お申込には振替（東京八二二

八七番）を御利用下さい。

新會友紹介

愛媛 小池博三（正覺寺）

大阪 石田紋次郎（森正義）

広島 内田定七（金龍寺）

山形 佐藤諦叡・富樫利夫

愛知 徳生寺

福岡 中野アサカ（専念寺）

神奈川 杉田義俊（藤井實應）

本誌を通じて信仰の道とともに歩むことの出来る善縁を感謝して新たに今度、會友となられた方々を御紹介申し上げます。一人が、更に一人をと、心から心へと、浄土の光は傳わり、そして互に淨められてゆくことを、私たちは念願いたします。

御紹介下さいました會友の方々に厚くお禮申し上げます。

（敬稱略、カッコ内は紹介者）

芝園だより

◇二月となると既に、寒さの中にもどこか早春へのひそやかな氣配が感じられる。夜など、波の聲、風の音に、しん／＼と骨身に徹するような寒さに再び嚴冬が襲つて來たかと思つていても、晝間、たま／＼氣がつくと、空の色、日の輝き、土の香にも春の近づきが感じられる。

◇社會にはこの眞多のように心を寒く凍らせるものがある。國際問題でも、日常身邊の些事にも、それがあつたが、しかしよく氣をつけてみれば、どこかに暖い春への息吹がありはしないだろうか。それを望み、それに努力したい。

◇今年は涅槃會に因んでの吉田先生の隨想はじめ、信仰の問題を身邊に顧みるに適わしい好短篇を集めることが出來ました。會友の方々の御投稿が相次いで居りますが紙面の許す限り掲載してお互に心を交わしてゆきたいと思ひます。

春遠からじ——家にも街にも、そして世界の上にも、之を期待して精進ませう。（藤田）

「浄土」 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年一月廿五日印刷
昭和廿六年二月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

振替東京八二二一八七番
會費番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

新刊浄土トラクト

春のお彼岸は信仰を深める好機

現代社會の混迷の中に、信仰を求める人々のために筆者がそれぞれ想を新たに、その道の一步をはつきり示した好著

信仰の導き

佐藤賢順著

一枚起請文

藤井實應著

本宗信仰の精粹、一枚起請文の永遠の生命は、いま身近かに語られた、必讀の書

◆各冊とも定價一部四圓送料六圓（切手代用可）

◆十部以上送料十二圓、十部を増す毎に六圓増、五十

部以上三十五圓、百部以上は送料當方負擔

◆教化施本に御活用の方は表紙に寺名刷込御相談に應じます（百部以上に限る）

東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

浄土トラクト既刊

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが気軽に手にできる廉價——浄土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられています。

お十夜の話 藤田寛雅著 賣切

お彼岸の話 竹中信常著 四圓送料六圓 残部僅少

お盆とおせがき 佐藤密雄著 四圓送料六圓

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番